

間を確保することが難しい状況にある。そのようなとき、長年の経験を持つ退職教授が相談相手となれば、学生にとっても指導教授にとっても大きな支えとなるであろう。もちろん現役の教授と退職教授との相互理解や包容力が不可欠であるが。

同じようなことは企業の世界でも考えられる。長く技術開発や経営に携わってきた人々の経験と知識は、若い世代にとってきわめて貴重なものである。これまでこうした役割は、必ずしも一つの仕事として明確に意識されてきたわけではないが、長寿社会の中では新しい仕事の領域として自然に現れてくる可能性もある。

高齢社会というと、どうしても社会保障や医療、介護といった問題が前面に出がちである。しかし見方を変えれば、それは社会の中に豊かな経験を持つ人々が増えているということでもある。長く生きてきた人々の知識や判断力は、本来、社会にとって小さくない価値を持っているはずである。

長寿社会は多くの課題を抱えているが、同時にこれまでとは異なる社会の姿を生み出す可能性も秘めているように思われる。高齢者の経験が新しい役割や仕事につながる社会が、これからどのように形づくられていくのか。私は最近、そんなことを折に触れて考えている。

以上は、筆者が學士会会報（No.979、2026年7月）の随想として寄稿したものに少し手を加えたものである。筆者も顧問をしていたグループの企業の一つである HTS（株式会社ヒューマンテクノシステム）は SI 構想の初期の段階から深い関心を寄せ、会社が持つ課題解決と発展に資する考えとして具体的な取り組みを進めてきた。何回かの SI 会議を通じて企業としての新しい方向性にも関わる進展を見せている。まさに、イノベーションが始まろうとしている。

高齢化は、これまで長く社会の課題として語られてきた。しかし見方を変えれば、それは世界に先駆けて日本が経験する新しい社会実験でもある。高齢者を支援の対象としてだけでなく、新しい価値創造の担い手として位置づけることができれば、超高齢社会はイノベーションの源泉となり得る。シルバード・イノベーションは、その可能性を探るための一つの考え方である。日本がこの分野で先行事例を築くことができれば、それは同じ課題に直面する世界各国に対しても大きな示唆を与えることになるだろう。

（*ありかわ せつお、九州大学元総長、放送大学学園元理事長）